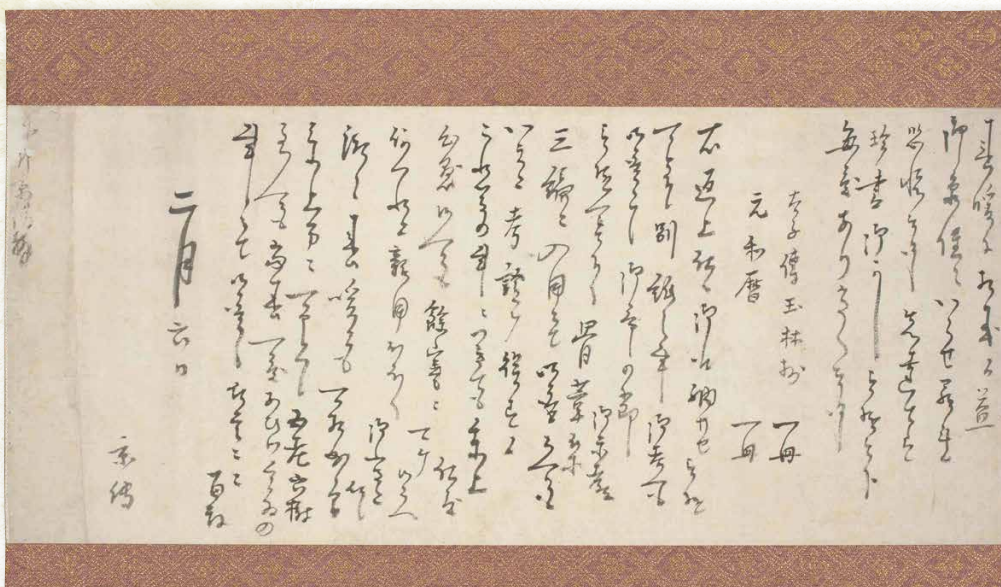


国文研ニュース

No.51 SPRING 2018



山東京伝書簡

目次

●メッセージ

国文学研究資料館情報システムの今昔物語 原 正一郎 1

●研究ノート

読書時間は森の中—尾張藩「御山守」資料に見る山間村落のひとつま— 太田 尚宏 2

現代における古典文学コミカライズの傾向について 小山 順子 4

●トピックス

平成29年度 連続講座「初めてのくずし字で読む『百人一首』」 小山 順子 6

平成30年度 連続講座「多摩地域の歴史アーカイブズ(古文書)を読む」 太田 尚宏 6

特別展示「伊勢物語のかがやき—鉄心斎文庫の世界—」 黄 昱 7

第15回日本古典籍講習会(平成29年度) 恋田 知子 7

国際研究ワークショップ「江戸の知と随想」2017冬パリ 神作 研一 8

フォーラム「東アジアにおける知の往還」第一回—書物と文化— 齋藤 真麻理 9

日本古典籍セミナー 齋藤 真麻理・恋田 知子 9

国際研究交流集会

「災害国におけるアーカイブズ保存のこれから—技術交流・危機管理から地方再生へ—」 高科 真紀 11

平成30年度 アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会通算第64回)の開催 12

閲覧室だより 神作 研一 12

第4回日本語の歴史的典籍国際研究集会の開催 13

「古典」オーロラハンター3 13

LOD Challenge 2017の最優秀賞に当館の「日本古典籍データセット」が使用されました 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 14

国文学研究資料館情報システムの今昔物語

原 正一郎（京都大学東南アジア地域研究研究所教授、国文学研究資料館情報発信委員会委員長）

国文学研究資料館における情報システムの開発は1980年初頭に始まった。日本で最初の漢字コードであるJIS C 6226-1978 (JIS78) が日本工業規格として定められたのは1978年である。日本初の商用パソコン（当時はマイコン）と言われるNEC PC-8001の登場は1979年であるが、漢字どころか「ひらがな」さえまともに扱うことができなかった。このような時期に、漢字による検索や目録印刷を実現していた国文学研究資料館の情報システムは、日本の人文学、ひいては日本の学術分野全体を見渡しても最先端のものであった。この情報システムを手がけられた諸先輩方はすでに一線を退かれているが、開発の困難さは想像に難しくなく、同業者として頭の下がる思いである。

この情報システムを私が引き継いだのは1991年であった。その後の十数年間の在職期間は、コンピュータが大型計算機からUNIXサーバへ、ネットワークが日本独自のN1ネットワークからInternetへ、パソコンがコマンド主体のDOSからグラフィック主体のWindowsへというように、情報環境が大きく変化した時期と重なっていた。情報システムが時代遅れにならないようにと、上司であった安永尚志教授（現名誉教授）の指導を受けながら、最初は大型計算機、その数年後は大型計算とUNIXサーバの折衷、さらに数年後にはUNIXサーバにより、情報システムの更新と開発を進めた。同時に、電子メールの開設、館内LANの敷設、インターネット接続などのインフラ整備も進めた。初期の諸先輩方とは異なる困難も多かったが、新しいことをやっているという充実感があった。データベースの改良についてキャンベル助教授（現館長）と相談したことなども、楽しい思い出である。当時のシステム更新を困難にしていた理由の一つは、データと応用とインタフェースのプログラムがうまく分離・設計されていなかったことである。そのため、データをビットレベルで分析したこともあった。充分とは言えないまでも、私の手がけた情報システムでは、これらの分離を実現している。またデータ記述法をXMLに変更したので、情報システム間のデータ可搬性は格段に向上した。その意味で、情報システムの先進性は確保できたかなと密かに思っている。ただし、見かけ上の変化は殆どなかったもので、その苦労は、（当時の）情報処理室以外の教職員には理解してもらえなかったのではないかと思う。いずれにしても、自分の作った画像データやデータベースが今も健在であることは嬉しいし、自分の付けたサーバ名がいまだに使われているのはご愛敬

であろうか。

さて21世紀も20年になろうとしている。私の在職時には揺籃期であったセマンティック・ウェブなどの情報技術も成熟・普及し、IIIFのような新しい技術も登場して、情報環境は格段に整備された。国文学研究資料館が推進している「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」は、この時流に見事に対応した事業である。高機能画像ユーザインタフェース、画像と全文データの連携、Webリンクによる関連資料との連携など、当時の自分には夢であった機能をみごとに実現している。画像データのCC BY-SAによる公開、手書き文字認識などへの応用が期待される日本古典籍字形データセットの公開など、在職中には困難であった（と思っていた）データ公開も進んでいる。さらに、画像認識によるテキスト検索などのユニークな共同研究も進められている。このように、日本の人文学を先導する情報システムの研究・開発を継続している国文学研究資料館に対して、OBの一人として嬉しく思うと同時に、エールを送りたい。

最後に、少し希望を述べさせていただく。古典籍のデジタル画像化と並行してデジタル翻刻はもっと進めてほしいし、個人的には現代語訳もほしい。デジタルテキストは情報学のみならず多くの分野において有用な研究データとなる。また、古典に興味を持つ一般利用者の裾野の拡大にも寄与すると思う。人工知能による翻刻という夢のある方法も視野に入りつつあるが、Webを使った共同作業支援ツールや事例も多くあるので、まずは有志による共同作業を試行してはどうであろうか。次に、国文学研究資料館の各種典拠ファイルをWebサービスとして公開してほしい。とりわけ海外の日本研究者や目録作成者などにとっては貴重な情報ツールとなるし、想定外の学術アプリが登場する可能性もある。最後に、大学共同利用機関法人として、館外の国文学研究者が作成したデジタルデータの保存にも関心を払ってほしい。これについては、人間文化研究機構の研究資源共有化推進事業を利用する方法もある。研究資源共有化推進事業は、国文学研究資料館の情報システムがきっかけとなっているので、もっと積極的に活用しても良いと思う。

昨今の学術関連予算の削減により、大学の学術情報機能は低下の危機に直面している。そのような中で、国文学研究資料館が人文分野の中心的な情報発信機関としてますます発展し、明るい展望を示してくれることを期待している。

読書時間は森の中

—尾張藩「御山守」資料に見る山間村落のひとこま—

太田 尚宏 (国文学研究資料館准教授)

1. 尾張藩「御山守」内木家の文書・記録類

筆者らは現在、科学研究費などの交付をうけて、岐阜県中津川市加子母にある内木哲朗家文書(約3万点)の整理・調査を進めている。内木家は、享保15年(1730)より明治5年(1872)まで、木曾御岳南麓に位置する尾張藩領の信州三浦山と「濃州三ヶ村」(裏木曾とも呼ばれる美濃国側の川上村・付知村・加子母村)の直轄林管理を担当する「三浦・三ヶ村御山守」の職にあった家である。この文書整理の過程で、二代目「御山守」を務めた内木彦七武久が記した「御山方御用并諸事日記」(9冊:宝暦13~安永4年)をはじめ、近世中期から明治初期の山役人の動向、山村地域の生活の詳細がわかる文書・記録類が数多く発見された。

尾張藩で直轄林の森林資源の保続・活用を司ったのは、木曾材木方と呼ばれる役所である。材木方の役人は、木曾・裏木曾地域の山々での御用出材を所管し、伐木・造材が行われている山へ手代・山手代あるいは御山守を派遣して現場の監督にあたった。内木家の文書・記録類には、こうした山役人の山中での具体的な行動が記述されている。この中には、職務に関わる内容はもちろん、森の中での暮らしぶりなど、ふだんはなかなか知ることのできない興味深い内容も散見される。小稿では、こうした記事のうち、特に山役人や村びとたちの「読書」に関わる記事をピックアップして紹介してみたい。

2. 「退屈」な山中での暮らしと読書

宝暦7年(1757)9月17日、御山守の内木武久は、加子母村の山中に滞在していた山手代の大嶋源六から一通の書状を受け取った。その書状には、本務に関わる内容に続けて、次のような記載があった。

扱又御太切之御書物寛々と読覽仕、山本退屈を御蔭にて相忘れ、徒然とも不存相暮し大悦仕候、則右御書物御返上申候間、御請取可被下候

これによると大嶋は、山へ入る前に武久から書物を借り出していたらしい。山中での暮らしは「退屈」なので、借りた書物を「寛々と読覽」し、おかげで「徒然」の日々を慰めることができたというのである。この書状には、返却する書物の一覧が添えられており、このとき大嶋が借

用した本が『前太平記』(目録とも21冊)、『保元・平治物語』(6冊)、『本朝智恵鏡』(6冊)の33冊であったこともわかる。

藩の御用材の伐出しは、毎年5月頃から10月前後にかけて行われる。山手代はこの間、山小屋に滞在して伐木・造材・流送という一連の作業を監督しなければならず、山中での生活が数か月におよぶことも少なくない。テレビやインターネットを楽しめる現代とは違い、一日の仕事が終わった夕方から夜にかけては、実に「退屈」なのである。そんな日々の退屈しのぎには、読書が一番だったのだろう。内木家は、決して蔵書家ではないが、自分たちが入山したり、藩の山役人が村を訪れたりしたときのために使う書物がある程度貯えられていた。

山役人たちは加子母村にやって来ると、しばしば武久に書物をリクエストした。宝暦8年9月21日、御用材の山出しの立会いに訪れた矢野という役人は、ぜひ『前太平記』を貸してほしいと申し出た。しかし『前太平記』は、前年に引き続き大嶋が借り受ける約束となっており、武久がその旨を伝えると、「然ハ曾我物語・保元平治綱目等借シ呉候様ニ」と頼んでいる。『前太平記』は山役人たちに人気があったようで、翌9年7月にも千村重右衛門が借りており、「去頃御借用申候(前)太平記、箱も出来、則箱ニ入、坂野惣左衛門ニ頼置申候、惣左衛門方御返進可仕候」とあるように、千村はわざわざ全21冊が入る木箱を新調して、武

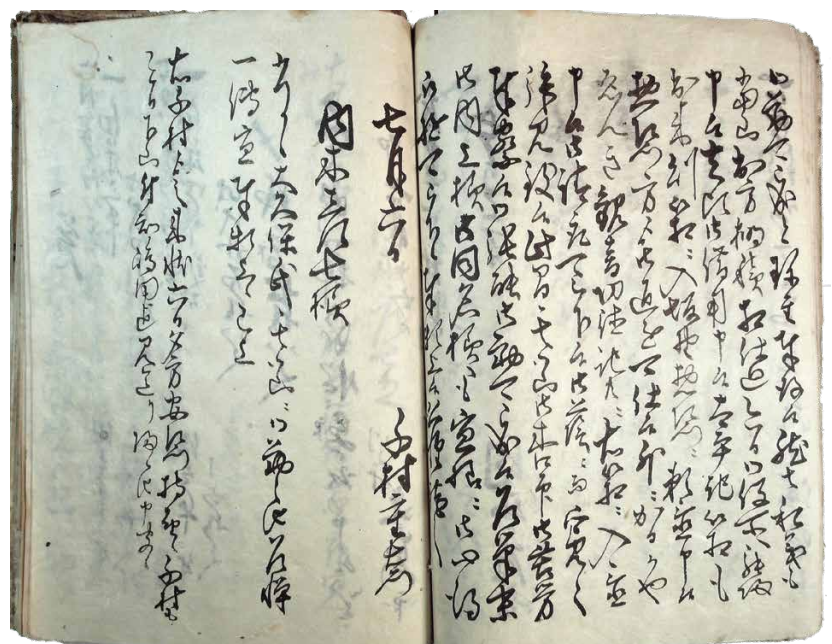


図 木箱を作って「前太平記」を返却(内木家文書 B58-8-5)

久へ本を返却している。この箱入りの『前太平記』は、12年後の明和8年(1771)9月にも日記に登場し、「本メ松田氏望之由、前太平記一通り借し呉候様申越候付、則式拾壺冊箱入之俣相渡し遣ス也」と、来村した元締手代の希望で箱ごと貸し渡されている。

山役人たちが好んで読んだのは、上記の『前太平記』をはじめ、『保元・平治物語』『平家物語』『曾我物語』『要覧太平記』などの軍記物語が多かった。材木方の山役人は、せいぜい手代格の下級藩士か、山手代・御山守に至っては手代格ですらない藩士以下の待遇であったので、かえって合戦や仇討ちといった武張った内容のものを好んだのかもしれない。また、山中での滞在が長期にわたることから、連続した長編の物語が好まれたとも考えられよう。

少し変わったところでは、浄瑠璃作品に関わる書物を読ませた記事も見られる。明和6年3月19日、武久は松株取出しの見分のために隣村の付知村を訪れた。このとき宿所となった又吉の家に、台所雑用の人足として村内の宇兵衛という百姓がやってきた。この宇兵衛が持参していた書物が『傾城阿古屋の松』(近松半二作)であった。その日の武久の日記には「此夜宇兵衛、傾城あこやの松二段読申候」と書かれており、翌日にも「宇兵衛にあこやの松一段為読申也」とある。おそらく二段目を宇兵衛に読ませて気に入った武久が、さらに一段目を所望したのであろう。また、その翌日の記事を見ると、今度は「宇兵衛二大峯桜二段為読申也」とある。これは『役行者大峯桜』と思われる。武久は、宇兵衛が持っていた浄瑠璃本を三夜連続で読ませ、「退屈」な時間をしのいだのである。

3. 書物の貸し借りと転写

加子母村は、中山道と高山道を結ぶ間道沿いに位置していたが、武久の日記を見ても、定期的に貸本屋などが往来していた形跡はなく、書物の入手は、もっぱら村内の人々からの貸し借りに頼ったようである。

武久は、自村内の村役人や商家・寺院などから多くの書物を借りてきている。また、御山守が管轄する付知村・川上村の知人や親類から書物を借用する事例も多い。

- ①政助ハ申越候ハ、珍敷本有之候、御覧候ハ、差越可申旨申越候処、(中略)初学訓五冊・農業全書拾冊・同写本壺冊、都合拾六冊、風呂敷二包、弥平次ニ誂候由ニて此朝弥平次ハ受取(明和6年4月21日)
- ②七ツ比酒屋政助、此中之乍礼、其節申聞候要覧太平記八冊物持来り、門ハ帰候(安永3年4月2日)

③此夜政助ハ前太平記壺箱・一休ばなし二冊共、又吉ニ為持越、受取也(安永3年9月2日)

④此中政助ニ借り寄セ候本、昨今写之也、尤今日迄ニ写し仕舞也(明和9年5月13日)

上の①～④は、近隣に住む酒屋政助との書物のやり取りに関する記事である。これによれば政助は、貝原益軒『初学訓』や宮崎安貞『農業全書』といった「珍敷本」や、『要覧太平記』などの書物を入手すると、武久に紹介して貸し出し(①②)、武久からは箱入りの『前太平記』や『一休ばなし』を借り受けて返却している(③)。④は武久が巡察のため三浦山に入山していたときの記事であるが、政助から借りた本を出張先まで持参して、雨の日や夜間などに山小屋で転写していたことがわかる。

武久は、このような書物の貸し借りを頻繁に行い、気に入ったもの、必要なものを転写して、自家の蔵書に加えていた。書物の流通がそれほど多くない地域でも、名古屋城下へ赴く機会などを利用して書物を入手し、それを地域の人々の間で貸借・転写し合って、読書ができる環境を整えていたのである。

また、自ら読書を行わない村の人々にも、書物は意外と身近な存在だったようである。明和5年正月11日の武久の日記には、「此夜慶安太平記読居候処、清十も来り、深更迄聞居申候て帰ル也」という記述がある。前日に村内の法禅寺から借りてきた『慶安太平記』を武久が読んでいると、隣家の彦十郎がやってきて、夜更けまでそれを聞いていたという。当時の読書が音読で、書物を読み聞かせる行為が広く行われていたことがわかる一例である。同じような記述は、安永2年正月25日の日記にもある。このときは「此節いわやおつき孫つれ来ル、右客人馳走二本読為聞申」とあり、彦十郎の妻のおつきが孫を連れて遊びに来たおりに、「馳走」として本を読み聞かせたというのである。自ら「読む」だけでなく、耳で「聞く」読書も一般的であったことが知られる。

山間村落というと、つつい“不便な片田舎”というイメージを持ちがちであるが、それぞれが可能な範囲で知識や教養を欲し、娯楽を享受していたことを、これらの記事は示してくれているように思われる。

*小稿の性格上、引用史料の註記は省略したが、典拠は内木哲朗家文書および徳川林政史研究所収集史料の「御用状留」「御山方御用并諸事日記」である。

現代における古典文学コミカライズの傾向について

小山 順子 (京都女子大学教授)

古典文学を漫画化した作品は数多い。古典文学を研究し、教育に従事する立場として、こうしたコミカライズ作品は、一般読者が古典文学に接する機会と捉えられ、また社会的にどのような関心が古典文学に向けられているかを測る材料となる。これまでに、伊藤一男「古典を題材にした劇画・まんが」(『国文学』33-11、1988.3)、倉田実「現代マンガの平安物」(講座源氏物語研究9『現代文化と源氏物語』おうふう、2007)、木田博子「古典漫画の二倍の楽しみ」(『リポート笠間』No.57、2014.11)が、古典文学を原作とした漫画作品を紹介している。これらは網羅的に、あるいは、筆者の関心の在処に則して作品紹介をしている。小稿では、これまで発表・刊行されてきた数多いコミカライズ作品を網羅的に取り上げるといよりも、現時点におけるコミカライズの傾向などについて指摘したい。

1、現代の漫画作品 (2018年2月末時点)

コミカライズ作品には、短編の単発作品として発表されるものも多い。単発作品を網羅的に取り上げるのは困難であるので、コミックが2巻以上発売されている連載・連作作品に絞って紹介する。また、古典文学を題材に取った漫画作品というと、パロディやタイムスリップ・転生物なども含まれるが、ここでは、あくまでも古典文学を「原作」として用い、ある程度のアレンジを加えているとしても、古典文学のストーリーを漫画として表現し、なおかつ現代に置き換えたりせず原作の時代背景を活かした作品に限定した。さらには、歴史上の人物、または古典文学の登場人物が登場したり、モチーフとして扱われる作品もあるが、ストーリーから明確に特定の文学作品を原作と定めることができるものを対象とする。

なお、古典文学を原作とする漫画の中で、重要な一角を占めているのが学習漫画の分野である。しかし小稿は、社会的にどのような関心が古典文学に寄せられているかを分析することを目的とするので、明らかに学習漫画として発売されているものは除き、エンタテインメント系漫画に限定する。また現代における関心の在処を探るという視点から、2010年以降に第1巻が発売され、今から3年前の2015年2月以降に最新刊が発売されているものを、以下に紹介する。第1巻の発売年月順に掲出する。

①杉田圭作・渡部泰明監修 『超訳百人一首 うた恋い。』(メディア・ファクトリー)

第1巻が2010年8月に刊行、既刊4巻。『百人一首』の恋歌を中心とした和歌を題材として、歌人にまつわるエピソードを短編風に描いた作品で、コメディ色が強いのが特

徴。よりコメディ色の濃いスピンオフ作品『超訳百人一首 うた恋い。【異聞】うた変。』(メディア・ファクトリー、第1巻刊行2012.8、既刊2巻)も刊行されている。なお、監修の渡部泰明が著者となり、杉田圭がイラストの『うた恋い。和歌撰 恋いのうた。』(メディア・ファクトリー、2013)もある。

初刷は8,000部からスタートしたが、口コミで人気を博し、発売4ヶ月で7刷10万部。2015年時点で、累計発行部数は87万部を突破している(「超訳百人一首 うた恋い。」公式HP、URL: <http://utakoi.jp/>)。2014年7~9月にはテレビ東京でアニメ化もされた。

②安彦良和『ヤマトタケル』(角川書店)

『サムライエース』(KADOKAWA)で2012年6月号より連載開始。同誌の休刊後、『コミックウォーカー』(KADOKAWA)に移籍した。カドカワコミックス・エースで第1巻が2013年2月に刊行、既刊4巻。原作は『古事記』で、安彦良和はこれまでも、『古事記』を原作とする一連のマンガ作品『ナムジ一大国主』『神武』『蚤の王―野見宿禰』を発表している。

③さいとうちほ『とりかえ・ばや』(小学館)

『月刊フラワーズ』(小学館)誌上で2012年9月号から連載開始。フラワーズコミックスaで第1巻が2013年3月発売。2018年3月に刊行された13巻で完結した。原作は『とりかへばや物語』で、月刊フラワーズの作品紹介には「男女×逆転 禁断のトランスセクシャル・ストーリー」と記されている。

④かわぐちかいじ『ジバング 深蒼海流』(講談社)

『モーニング』(講談社)2013年1月号から連載開始。モーニングコミックスより第1巻が2013年5月刊行、既刊21巻。源平合戦を描き、歴史物という捉え方もできるが、原作は『平家物語』といってもよいだろう。

⑤吉川うたた『鳥啼き魚の目は涙〜おくのほそみち秘録』(秋田書店)

『プリンセス GOLD』(秋田書店)2013年10月号から連載開始。プリンセスコミック(秋田書店)から2014年3月に第1巻刊行。2016年9月に発売された第6巻で完結した。原作は松尾芭蕉『奥の細道』で、芭蕉と曾良の旅を描く。

⑥葉月つや子『鶯羽屋みだれ帖―好色一代男異聞』(ぶんか社)

第1巻が2014年11月に刊行、既刊2巻。原作は井原西鶴『好色一代男』である。葉月つや子は、レディスコミック・BL(ボーイズラブ)で活躍する漫画家。他にも古典文学を漫画化した作品に『艶聞源氏物語』(ぶんか社、2010)がある。

⑦山内直実『おちくぼ』(白泉社)

『別冊 花とゆめ』（白泉社）誌上で2015年1月号から連載開始。花とゆめコミックスで第1巻が2015年8月に発売、既刊4巻。原作は『落窪物語』である。山内直実は、氷室冨子原作『ざ・ちえんじ』（とりかへばや物語の翻案）・『なんて素敵にジャパネスク』・『月の輝く夜に』と、平安朝を舞台にした作品を多く発表しており、本作もその一環と位置づけられる。

⑧よしむらなつき『里見☆八犬伝 REBOOT』（竹書房）

『近代漫画』（竹書房、電子書籍）で2015年4月から連載開始。バンブーコミックスから2015年10月に第1巻が刊行、既刊5巻。未完で連載終了した原作者の『里見☆八犬伝』（連載1997～2002、コミック全6巻、エニックス、1998～2002）と『新装 里見☆八犬伝』（連載2003～2004）のセルフリメイクである。原作は曲亭馬琴『南総里見八犬伝』。

⑨桜田雛『黒源氏物語 花とみるらむ』（小学館）

「花とみるらむ～恋虜源氏物語～」の題で『チーズ』（小学館）2015年6月号から連載開始。フラワーコミックスから『黒源氏物語 花とみるらむ』の題で第1巻が2015年9月に刊行。2016年5月刊行の第3巻で完結した。原作は『源氏物語』で、冒頭から光源氏と紫上との結婚までを描く。

⑩『男色大鑑』（KADOKAWA）

第1巻にあたる武士編が2016年5月に刊行され、以下、歌舞伎若衆編（2016.6）、無残編（2016.9）が既刊。原作は井原西鶴『男色大鑑』。男性の同性愛を扱うBL（ボーイズ・ラブ）作品で、B'S-LOVEY COMICSによるアンソロジー。同書について、研究者による考察・発言をまとめた染谷智幸・畑中千晶編『男色を描く 西鶴のBLコミカライズとアジアの〈性〉』（勉誠出版、2017.8）がある。なお編者の一人である畑中千晶は、コミック版の監修者でもある。

2. 現代の傾向と社会的関心

以上、10作品を確認した。見落としがあることが予想されるので、ご教示を願いたい。通覧すると、現代のコミカライズ作品の特徴として、以下の点を指摘することができる。

まず、①③⑦⑨の4作品が王朝文学を原作としたものである。平安時代ないしは王朝文化を題材とする作品は、エンタテインメント系漫画作品、特に少女漫画での人気が高いという通時的な傾向がある。

一方、江戸時代の文学を原作とするのが、⑤⑥⑧⑩の4作品である。時代背景として王朝と並んで人気なのが、江戸時代である。

10作品のうち、王朝文学・江戸時代以外を扱うのは②と④である。特に②について付言しておく、ここで取り上げた作品は上記の条件に当てはまるもののみ限定してい

るが、単発作品を含めると、コミカライズ原作としての『古事記』の人気は非常に高く、『源氏物語』と双璧をなす。上記条件には外れるが、五月女ケイ子『五月女ケイ子のレッツ!! 古事記』（講談社、2008）、久松文雄『まんがで読む古事記 1～6、倭建命』（青林堂、2009～2014）、こうの史代『ほおるぺん古事記（全3巻）』（平凡社、2012～2013、平成25年度「古事記出版大賞」稗田阿礼賞受賞）、近藤ようこ『恋スル古事記』（角川書店、2012）など、コミカライズは数多い。

また、①③⑤⑦⑨の5作品は、少女マンガとして発表されている（「少女マンガ」をどのように定義するかは難しいが、性愛表現に重点を置かず、心理描写を主とした、若い女性向けのマンガという枠組みで捉えておく）。通時的に、古典文学作品のコミカライズは、少女漫画に多い。また、⑥はレディースコミック、⑩はBL（ボーイズラブ）のジャンルに分類される作品である。性愛描写に力点が置かれるという違いはあるが、レディースコミックおよびBLも、女性を読者対象とするジャンルである。古典文学を原作とする漫画は、少女漫画・レディースコミック・BLと、女性読者が中心であるという傾向がある。

常日頃、古典文学を研究対象として捉えていると、学術的な価値から文学を測りがちである。しかし、古典文学に向けられた一般的・社会的な関心の在処がどこにあるかという点を考えることは、古典文学への窓口の「開け方」を模索することに繋がるのではないかと、という問題意識から、上記を研究ノートとしてまとめた。

付記：本稿は、第3回日本語の歴史的典籍国際研究集会における口頭発表「古典の普及・教育と漫画」の後半部をまとめたものである。なお、国文研主導共同研究「青少年に向けた古典籍インターフェースの開発」による成果の一環である。

平成29年度 連続講座 「初めてのくずし字で読む『百人一首』」

連続講座「くずし字で読む『百人一首』」は、立川市教育委員会との連携で、平成27年度から始まり、平成29年度で3年目を迎えました。平成29年度は、5～9月の木曜日に全8回の開催でした。3年目の平成29年度で『百人一首』をすべて読了しました。なお平成29年度は、連続講座名を「初めてのくずし字で読む『百人一首』」としました。当館の連続講座は、すでにくずし字を読む勉強を重ねてこられた方にとっては、簡単すぎる、レベルが合わないと感じられがちであることが、アンケートから判明していました。そのため、「初めての」と付け、この連続講座が初心者向けの内容であることを講座名で示すことにしました。

テキストに使用したのは『錦百人一首あづま織』です。江戸時代中期の安永4年(1775)に刊行され、歌仙絵は勝川春章(かつかわ・しゅんしょう、1726-1729)が描き、和歌を猿山周之(さやま・しゅうし)が書いた本です。立ち姿を中心とする美しい歌仙絵で、江戸時代に大変人気を博した本です。テキストを希望される方も多く、国文学研究資料館HPからテキストの全ページをダウンロードできるようにしました。(http://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/images/H29kuzushijiall.pdf)

3年間にわたり、当館の古典文学を専攻する教員が、各回の講座を担当しました。教員たちの専門は、必ずしも和歌に限りません。しかし、それぞれの専門分野による多様な切り口からの『百人一首』へのアプローチは、受講生からも好評を得ました。

(小山 順子)

平成29年度担当講師

- 1 5月18日 神作 研一
- 2 6月1日 クリストファー・リーブス
- 3 6月15日 江戸 英雄
- 4 6月29日 木越 俊介
- 5 7月13日 恋田 知子
- 6 8月24日 相田 満
- 7 9月7日 ディディエ・ダヴァン
- 8 9月21日 小山 順子



平成30年度 連続講座 「多摩地域の歴史アーカイブズ(古文書)を読む」

平成30年2月、国文学研究資料館は、立川移転から10周年を迎えました。

これを記念して、今年度の連続講座は、多摩地域の歴史アーカイブズ(古文書)をとりあげます。国文研では、旧文部省史料館時代から収集した大名文書・村方文書・個人文書など、約60万点におよぶ歴史アーカイブズを所蔵しています。今回は、これらの中から江戸～明治時代の多摩地域に関わる文書・記録類を選んで、受講者の皆さんとともに解説し、初めての方にもわかりやすく解説していきます。

今までの「源氏物語」や「百人一首」といった文学作品とはひと味違い、解説することを通じて、当時の多摩地域の姿をみずから新発見することができる資料です。地域の歴史や資料に対する理解を深め、アーカイブズを保存していく大切さを知っていただく機会になればと考えています。

日程と講師・テーマ・使用する文書群は、以下の通りです。

- 5月10日(木)：太田尚宏「オリエンテーション」(石坂家文書)
- 5月17日(木)：大友一雄「大岡越前守忠相の地方御用」(大岡家文書)
- 5月23日(水)：渡辺浩一「玉川上水を読む」(大岡家文書)
- 5月30日(水)：西村慎太郎「秋川の鮎漁と争論」(五日市村文書)
- 6月7日(木)：太田尚宏「天保の飢饉と村方の御救」(杉本家文書)
- 6月21日(木)：宮間純一「王政復古の混乱と新政権の『御用』」(富沢家文書)
- 6月28日(木)：加藤聖文「明治天皇と聖蹟桜ヶ丘」(富沢家文書)
- 7月5日(木)：青木 睦「紙に包まれた離縁一件」(富沢家文書)

(太田 尚宏)



特別展示「伊勢物語のかがやき—鉄心斎文庫の世界—」

平成29年10月11日(水)～12月16日(土)、当館の特別展示「伊勢物語のかがやき—鉄心斎文庫の世界—」が開催されました。『伊勢物語』の一大コレクションである鉄心斎文庫は平成27年度に当館へ寄贈され、平成28年度～平成30年度の3カ年、基幹研究「鉄心斎文庫伊勢物語資料の基礎的研究」(研究代表者:小林健二教授)が立てられました。今回の特別展示は、その成果報告の一環です。展示中、当館教員・客員教員によるギャラリートーク(10月11日小林健二教授、11月2日小山順子准教授、12月7日恋田知子助教)と伊勢物語セミナー(10月11日山本登朗客員教授・恋田知子助教、11月2日小林健二教授・小山順子准教授)が開催されました。



55日間の会期中、3242名の方にご来館いただき、大盛況のうちに幕を閉じることができました。会期中に実施したアンケートは138名から回答を得て、今回の展示について満足と答えた方は85.5%を占めています。来館者を職業別に見ると、研究者が7.7%、学生が10.0%を占めるほか、一般利用者は82.3%にのぼります。年齢別に見ると、50代～70代(50代14.0%、60代26.5%、70代が22.8%)の割合が高いことがわかります。展示の「特に良かった点」について、多くの方々は古写本、絵入本、絵巻などの実物が贅沢に並べられ、見比べができることを評価していました。また、「名品・描く・書く・学ぶ・遊ぶ・文庫史」の六部からなる本展示の構成についてもわかりやすかったとご好評いただきました。今回の展示では、AR技術によるデジタル展示を行いました。11月2日と12月7日のギャラリートークの後、「古典AR」体験会を行い、展示室にiPadを常設するなど試みました。ARは展示資料にタブレットやスマートフォンをかざすことで、作品と人物の解説や現代語訳・英語訳・高精度な画像などのデジタル情報が表示される技術ですが、面白かったと評価いただいた一方、アプリの操作が難しいというご意見もありました。今後はデジタル展示の改善を含めてよりよい展示に取り組んで参りたいと思います。(黄 昱)

第15回日本古典籍講習会(平成29年度)

平成30年1月16日(火)から19日(金)までの4日間、国立国会図書館と国文学研究資料館の共催で、日本古典籍講習会が開催されました。

本講習会は年に一度、古典籍を所蔵する機関の職員を対象に、古典籍が広く活用されるよう、書誌学の知識や整理方法の技術を修得するためにおこなわれています。受講者の要望を取り入れつつ、見直しを重ね、今年で15回目を迎えました。

まずはじめの3日間は国文研において、教員が講師となり、古典籍の基礎知識、くずし字、表紙の文様、写本の奥書・識語、刊記の読み方、装訂、江戸の出版文化、近代文献の奥付の読み方、蔵書印の見方・読み方など、古典籍を取り扱う上での基礎的な知識について解説しました。続いて、国文研の職員が、和古書目録データベースの説明や施設案内などをおこないました。4日目は国会図書館に場所を移し、古典籍の保存・管理の説明や簡易帙の作成など、実際の業務に即した実習作業がおこなわれました。



受講者からは、「研究者、実務担当者両方の話が聞けて有益であった」、「古典籍の整理・目録記述の方法だけでなく、古典籍を読むのに必要な知識、取り扱い方、保存の考え方を基礎から学べた」、「実際に原資料を見ることができ、古典籍を身近に感じるようになった」、「補修の実習など修理業務に活用できそう」、「古典籍を所蔵する図書館の職員と交流ができた」など、貴重な感想や意見が多数寄せられました。今後も現代のニーズにあわせて、多彩で充実した講義内容を展開できるよう、努めてまいります。(恋田 知子)

国際研究ワークショップ「江戸の知と随想」2017 冬パリ

国文研の新学術領域科研「古典知 JAPAN—知を構成するトータリティの創造的回復に向けて—」(代表：神作研一 *申請中〈当時〉)のプレ国際シンポとして、去る2017年12月7日(木)に、パリ・デイドロ大学において国際研究ワークショップ「江戸の知と随想」を開催しました。主催はパリ・デイドロ大学と国文研。コレッジ・ド・フランス、C R C A Oほかの後援を受けました。参加者は18名。

モンテーニュの『随想録』(Les Essais)を挙げるまでもなくフランスは随想の国とも言えますが、そのかの地において、今般のWSでは、知と随想を基軸として江戸の文化文学の種々相を多角的に繙くことを志しました。新学術領域科研の要諦である情報研ブランチの代表大山敬三氏は最新のマルチ・モーダルアクセスを紹介、パリのM. ハイエク、D. ストリューヴ両氏ほか都合7名の発表をめぐって、M. V. バロン、D. ダヴァン、S. 寺田、A. 堀内四氏のコメントを切り口として、自在で活発な議論が交わされました。プログラムは以下の通り。

- ◇13:30 - 13:45 挨拶 M. ハイエク (パリ・デイドロ大学)
イントロダクション 神作研一 (国文研)
- パネル【A】江戸の知と随想 コメンテーター M. V. バロン (イナルコ)、D. ダヴァン (国文研)
- ◇13:45 - 14:15 歌論歌話と随想のあいだ 神作研一 (国文研)
- ◇14:15 - 14:45 徒然草と江戸文学 川平敏文 (九州大学)
- ◇14:45 - 15:15 近世文学のジャーナルとしての随想随筆と『徒然草』D. ストリューヴ (パリ・デイドロ大学)
(15:15 - 15:45 コーヒーブレイク)
- パネル【B】知の展開、知の周縁—医と学と情報工学と—
コメンテーター S. 寺田 (イナルコ)、A. 堀内 (パリ・デイドロ大学)
- ◇15:45 - 16:15 観念論から近世的合理主義への展開—『本草綱目』から『大和本草』へ— 入口敦志 (国文研)
- ◇16:15 - 16:45 知の基盤形成と分類思想—『和漢三才図会』における動物類の再編成—
M. ハイエク (パリ・デイドロ大学)
- ◇16:45 - 17:15 国学と文献学と philology—20世紀前半における日本の文学研究— 谷川恵一 (国文研)
- ◇17:15 - 17:45 マルチモーダルアクセス技術による古典籍へのアプローチ 大山敬三 (国立情報学研究所)
- ◇17:45 - 18:00 閉会の辞 谷川恵一 (国文研)

お世話になったハイエク先生をはじめとするパリの皆さまと、同行して下さった大山・川平両先生に、改めて心より篤く御礼を申し上げます。
(神作 研一)



フォーラム「東アジアにおける知の往還」第1回—書物と文化—

2017年10月24日(火)13時～16時半、国文学研究資料館オリエンテーション室において、当館と韓国・高麗大学校グローバル日本研究院との共催によるフォーラム「東アジアにおける知の往還」第1回—書物と文化—が開催されました。

当館と同研究院とはかねてより学術交流協定を締結し、交流を深めて参りましたが、国際連携部ではさらなる発展を企図して同研究院と協議を重ね、今回のフォーラム開催に至りました。私たちはこれを2機関の間で閉じられた一回かぎりの企画としてではなく、当館の学術交流協定先を中心にさまざまな海外機関と協働し、広い視野のもとに継続的な研究交流を展開したいと考え、フォーラム名に「東アジアにおける知の往還」と冠しました。

当日は高麗大学校グローバル日本研究院から徐承元院長をはじめ4名の研究者をお迎えし、ロバート・キャンベル当館館長の開会挨拶に続いて、海野圭介准教授の司会により、日韓の書物をめぐる文化について5本の研究発表が行われました。

『源氏物語絵巻』における画面構成の方法

金秀美氏(高麗大学校日語日文学科副教授)

『蒙古襲来絵詞』の図像の伝承と変容

金容激氏(同研究院教授)

『三國遺事』を巡る二、三の問題について

宋浣範氏(同上教授・副院長)

書物のかたちとジャンル

入口敦志氏(当館准教授)

遺稿集の世界

谷川恵一氏(同上教授)

ご発表ではそれぞれの専門に根ざした新たな知見が披瀝されました。たとえば金容激氏のご発表では、明治期以降、『蒙古襲来絵詞』を用いた多くの絵画が政治状況等を反映して変容するさまが明らかにされるなど、当時の画学のありようや日韓両国の政治や文化について思いを致すひとときとなりました。20名を超える参加者からの活発な質疑と相俟って、「知の往還」と称するにふさわしいフォーラムは盛会のうちに幕を閉じました。

企画の実現には高麗大学校グローバル日本研究院の徐院長をはじめ、当館との間を繋いで下さった金秀美氏に格別のご指導とご高配を賜りました。改めて深謝申し上げます。

今後もこのフォーラムには文学のみならず、歴史学や思想史、美術史、宗教学等々、幅広い分野の研究者にご参加頂きたいと考えております。是非、ご注目下さい。(齋藤 真麻理)



金秀美氏、宋浣範氏のご発表と質疑応答の様子

日本古典籍セミナー

国文学研究資料館の「日本古典籍セミナー」という国際交流活動が公的に紹介されるのは、本紙が初めてであると思われまふ。そこでまず、その概要をご紹介します。

すでに当館は海外で日本古典籍ワークショップを3回開催しています。これは十余年の歴史を持つ「日本古典籍講習会」の海外版を展開すべく、今西祐一郎館長(当時)の発案から神作研一教授が尽力されたもので、その地に伝存する日本古典籍を活用する点が特色です(「国文研ニュース」No.47)。

これを承けて国際連携部では、古典籍に関して海外の学術交流協定先と連携して行うワークショップを「日本古典籍セミナー」という呼称で統一し、成果の蓄積と講義の再現性を図るため、連番を付して当館HPへ講義資料を掲載することとしました。現在、当館は大規模学術フロンティア促進事業により、古典籍30万点の画像や書誌データから成る「新日本古典籍総合データベース」構築を推進していますが、あらゆる分野の書物を容易に参照できる環境が整えば整うほど、古典籍を正しく扱い、読み解く力が必須となり、それによってその面白さを味わうことも可能となります。当館が大規模な日本古典籍の画像を提供する機関だからこそ、古典籍を理解するための技術や意義を伝えるセミナーを車の両輪となる活動として位置づけ、日本文学研究の発展に貢献する必要があるといえまふ。

日本古典籍セミナー第4回「朝鮮軍記と出版文化」

このたび、中国北京の地で日本古典籍セミナーが実現しました。初の試みとして受講生が関心を寄せる「朝鮮軍記」に焦点を絞り、当該分野を牽引する研究者を講師に招き、当館の「新日本古典籍総合データベース」を活用した講義を賜りました。

- ◇日 時：2018年2月27日(火) 9時半～17時半
- ◇場 所：北京外国語大学北京日本学研究中心 403室
- ◇主 催：北京外国語大学北京日本学研究中心・国文学研究資料館
- ◇テーマ：朝鮮軍記と出版文化
- ◇講 師：井上泰至・防衛大学校教授、大高洋司・当館名誉教授、
齋藤真麻理

◇参加者：20名

井上泰至氏「朝鮮軍記研究の現状と課題」は研究史を検証しつつ、一連の作品群を研究する意義や課題について、思想史・政治史的側面も含めた多角的な視点から論じられ、大高洋司氏「軍記と読本—秋里籬鳥『絵本朝鮮軍記』の位置」は書誌学的分析を起点に、籬鳥の「絵本もの」「図会もの」の特質にも論及されました。大学院生から課題の核心に迫る質問が次々寄せられ、最後は齋藤が「新日本古典籍総合データベース」のデモンストレーションを行い、充実した一日が終了しました。

セミナー開催には同センターの郭連友教授(主任)および張龍妹教授に格別のご指導とお心遣いを賜りました。講師の先生方にはご多忙の中、当方のご依頼をご快諾下さり、素晴らしい講義を賜りました。ご尽力賜った皆様にご心より感謝申し上げます。
(齋藤 真麻理)



井上氏、大高氏の講義風景

日本古典籍セミナー第5回 Seminar on Pre-modern Japanese Books in Honolulu, 2018

2018年3月1日、ホノルルにて日本古典籍セミナーが開催されました。

- ◇日 時：2018年3月1日(木) 10時～16時
- ◇場 所：ホノルル美術館レクチャーホール
- ◇主 催：ハワイ大学マノア校、ホノルル美術館、
国文学研究資料館、総合研究大学院大学

◇参加者：36名

◇講 師：落合博志、神作研一、恋田知子、入口敦志、山下則子

当日はロバート・ヒューイ氏(ハワイ大学マノア校教授)とロバートキャンベル当館館長の挨拶から始まり、バゼル山本登紀子氏(ハワイ大学マノア校司書)と神作研一氏の趣旨説明に続いて、「写本について—写記(奥書)と識語—」(落合博志)、「版本について—刊記—」(神作研一)、「レイン・コレクションの物語草子」(恋田知子)、「日・中・韓版本の様式について—レイン・コレクションを例に—」(入口敦志)の各講義および基調講演「『獣絵本つくし』の背景にあるもの」(山下則子)が行われ、バゼル山本登紀子氏が総括して下さいました。

今回もプログラムの要はホノルル美術館のレイン・コレクションの蔵書研究であり、コレクションの意義が改めて浮き彫りとなりました。なお、前回以後、ハワイ大学マノア校の学生有志により、レイン・コレクションの調査作業も進められており、今回はその際に生じた疑問等に答えるべく、2日間にわたって美術館の収蔵庫で数名の学生を順々に招き、書誌調査のレクチャーを行いました。古典籍の前に次々と熱心な質疑が寄せられ、セミナーを含め充実した3日間となりました。

今回もハワイ大学マノア校のロバート・ヒューイ教授とバゼル山本登紀子ライブラリアン、ホノルル美術館のショーン・オハロー館長とショーン・アイクマン東洋美術部長、南清恵リサーチアシスタントより、格別のご指導とご高配を賜りました。なお、ホノルル出張については総研大国際連携推進事業教育研究連携事業経費の支援を賜りました。山下則子文化科学研究科長および落合博志日本文学研究専攻長のご配慮にも御礼申し上げます。

(恋田 知子)



国際研究交流集会

「災害国におけるアーカイブズ保存のこれから—技術交流・危機管理から地方再生へ—」

2018年2月6日、国際研究交流集会「災害国におけるアーカイブズ保存のこれから—技術交流・危機管理から地方再生へ—」が国文学研究資料館にて開催されました。本会では、2013年よりマレオ・マレガ神父収集文書調査プロジェクトで保存修復技術の交流を行ってきたバチカン図書館と、イタリアでアーカイブズ・レスキューの指揮にあたってきた国立アーカイブズ・図書資料保存修復中央機構の方々を招聘し、地震・津波・噴火・洪水などの災害リスクが高い日本とイタリアにおける被災アーカイブズのレスキュー技術と危機管理対策、公文書管理と多彩なテーマで5つの報告がありました。

青木睦「アーカイブズ・プリザーベーションの現状と課題」では、日本における伝統的保存の検証と、1966年イタリア・フィレンツェ大洪水以降の現代的保存への発展について述べたのち、阪神淡路大震災以降の災害対策や公文書レスキューの現状を踏まえて、日常管理の徹底と防災計画の策定、発災時の緊急対応の重要性が示されました。

アンヘラ・ヌーニェス＝ガイタン「マレガ・プロジェクトにおける保存修復技術の交流と協働」は、マレガ神父収集文書のデジタル化のための修復での日本の専門家と修復士との技術交流と、パピルスや羊皮紙など多様な書物を収蔵する図書館での洪水時のレスキュー技術について紹介するものでした。

マリア・レティツィア・セバスティアーニ、エウジェニオ・ヴェーカ「イタリアにおける被災アーカイブズ・レスキュー」では、セバスティアーニ機構長によるイタリア国立アーカイブズ・図書資料保存修復機構の紹介ののち、ヴェーカ副機構長より「文化財の緊急時の計画」に基づいた2016年イタリア中部地震での消防隊と連携したアーカイブズのレスキュー、水損資料の被災状況にあわせた緊急時対応の具体的な方針が提示されました。

栗原祐司（京都国立博物館）「ユネスコ・ブルーシールドと日本防災ネットワークの現状」では、文化財防災ネットワーク推進本部立ち上げをはじめとした防災に対する様々な取り組みの紹介と、ブルーシールド国内委員会の設立に向けた最新の動向を報告いただきました。

加藤聖文「大規模災害と公文書管理」は、公文書管理法施行後も自治体の文書管理条例を制定する動きは鈍く、自治体の文書管理における保存期限満了文書の大量廃棄、市民への活用ができない問題について指摘がありました。更には、災害発災時の適切な情報共有と迅速な活用のために防災計画の中に具体的な公文書管理計画を組み込む必要性と、当面の対策として公文書館の存在しない自治体の中間保管庫の設置の有効性を明示しました。

当日は、文書館・図書館関係者、大学・自治体職員、大学生、修復家の方々など60名が参加し、報告後にはデモンストレーション「被災資料の乾燥・洗浄プログラム」を行いました。デモンストレーションでは、水損被災資料のレスキューで用いた物品を使い、乾燥・洗浄体験をしていただきました。特に、キッチンペーパーを挟み込んだ段ボールを使った水損被災資料の乾燥方法や、水を張ったコンテナに発砲プラスチックボードを浮かせ、その上でネットに挟んだ文書を刷毛で洗浄する方法（フローティング・ボード法）は、多くの参加者の方々が関心を示され、短時間で実際に体験していただきました。

終盤の意見交換では、当館の青木睦准教授が進行し、被災公文書の救助・復旧にあたった岩手県釜石市役所職員の方よりレスキューされた被災公文書が業務でどのように利用されているかお話しいただき、公文書保存の意義について現場の職員の声を聴くことができました。その他、被災資料レスキューの際に携わる人材の育成や両国のレスキュー体制の違いについての質問も挙がり、充実した意見交換となりました。

なお、当日会場には、被災文化財・被災資料レスキュー活動に携わった26団体より提供を得た活動紹介を掲示しました。また、東日本大震災・フィレンツェ大洪水の被災文書や、濡らしたコピー用紙・和本・雑誌も展示し、手に取りながらその重さや感触を味わっていただきました。

日本は、東日本大震災以降も関東・東北豪雨、熊本地震など多くの災害に直面してきました。今後30年以内には、約70パーセントの確率で東京の直下型地震、南海トラフ地震の発生も予測されており、よりいっそう災害への備えが求められています。今回の研究会を通して、国際的な課題として、公文書の適切な保存・管理と危機管理対策の重要性を共有することができました。

なお、本研究集会はトヨタ財団研究助成プログラム「被災アーカイブズの新たな保存技術発信へのアプローチ」、科学研究費補助金基盤研究（A）「バチカン図書館所蔵豊後切支丹資料の国際的情報資源化に関する海外学術調査研究」などによるものです。

（高科 真紀）



平成30年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会通算第64回）の開催

1. 趣 旨

古文書・公文書から電子記録まで、アーカイブズ（記録史料）は、人類共有の文化遺産として、また現代に生かすべき情報資源として、極めて大切なものです。近年、我が国でもアーカイブズの重要性に対する認識が高まり、文書館・資料館等の史料保存利用機関が増加するとともに、これらの機関においてアーカイブズの保存と利用サービス等の業務を担うアーキビスト（記録史料専門職員）の養成が急務となってきています。国文学研究資料館では、このような動きに応えるべく、「アーカイブズ・カレッジ」を実施し、アーカイブズの収集・整理・保存・利用等に関する最新の専門的知識、技能の普及に努めています。特に長期コースではアーカイブズ学の研究に意欲を持つ方を歓迎します。なお、この研修会は13の大学院で単位認定されており、大学院教育協力の一つの形でもあります。

2. 期 間

- A. 長期コース（東京会場） 国文学研究資料館
 前期＝平成30年7月17日（火）～8月3日（金）
 後期＝平成30年8月20日（月）～9月7日（金）
- B. 短期コース（鶴岡会場・山形県） 鶴岡市郷土資料館
 平成30年11月12日（月）～11月17日（土）



3. 申込資格

次のいずれかに該当する者です。

- (1) 大学院在学中または大学卒業以上の学歴を有する者で、アーカイブズ学に強い関心を持つ者。
- (2) 文書館などの歴史資料保存利用機関をはじめとして、官公署・大学・企業等の文書担当部局及び歴史編纂部局、又はアーカイブズを取り扱う必要のあるその他の組織に勤務し、アーカイブズの収集・整理・保存・利用等の業務に従事している者。

4. 受講料

無料。ただし、横浜開港資料館の観覧料（200円程度）は受講者の負担となります。

5. その他

申込及び詳しい情報等については当館 Web ページ (<http://www.nijl.ac.jp>) をご覧いただくか、管理部学術情報課企画広報係（TEL 050-5533-2910）までご連絡ください。

閲覧室だより

閲覧室に関わる最新の動向を5点、紹介します。

- 【A】Wi-Fi（公衆無線 LAN）の導入
2017年12月22日より、閲覧室で公衆無線 LAN（FREESPOT）をご利用いただけるようになりました（無料）。
- 【B】コイン式課金機の導入
2018年度より、セルフコピーの際にコイン式課金機をご利用いただけるようになりました。
- 【C】月末休室日の廃止
2018年度より、月末休室日を廃止しました。
- 【D】蔵書点検期間の変更
これまで年度末（毎年3月最終週）に設けていた蔵書点検期間を見直して、2018年度より、毎年2月下旬（第4週）に繰り上げます。蔵書点検期間を入試繁忙期に移すことで、これまで要望が多く寄せられていた年度末の開室を実現させました。
- 【E】データベースの新規契約
2018年度より、以下の4種のDBを新たにご利用いただけるようになりました。
 - (1) 日本文学WEB図書館の「平安文学ライブラリー」
 - (2) ジャパンナレッジの『群書類従』
 - (3) ジャパンナレッジの『角川古語大辞典』
 - (4) 毎日新聞社の「毎策」

かんさく
(神作 研一)

第4回日本語の歴史的典籍国際研究集会の開催

歴史的典籍 NW 事業の共同研究の成果等を広く紹介するため、国際研究集会を下記のとおり開催します。参加費は無料でどなたでも参加できます。なお、遠隔地でもご覧いただけるよう、当館 HP から当日の様様をライブ配信するとともに、終了後も動画配信いたします。発表要旨や発表資料等の詳細は HP や公式ツイッターで紹介いたしますので、こちらもどうぞご利用ください。

日 時：平成30(2018)年7月27日(金) 13:30～17:00
7月28日(土) 10:00～17:00

場 所：国文学研究資料館 大会議室(東京都立川市緑町10-3)

内 容：基調講演、パネル討論4本、研究報告1本

「古典」オーロラハンター3

本年2月18日(日)に、当館大会議室において、市民参加型ワークショップ「古典」オーロラハンター3を開催しました。参加者は一般から公募し、スタッフを含めた38名が一緒になって奈良・平安・鎌倉時代の古典籍からオーロラ・彗星・隕石などの情報を探しました。

前半は研究代表者である国立極地研究所の片岡龍峰准教授、茨城大学の野澤恵准教授、国立天文台太陽観測プロジェクトの萩野正興専門研究職員、京都大学大学院理学研究科附属天文台飛騨天文台の大辻賢一研究員による天文現象に関する講演があり、特に、江戸時代に国友一貫斎がスケッチした214枚の太陽黒点の図を、データとして切り出して動画としたものを、ダジック・アースという球体スクリーンに投影する装置で、当時の太陽の自転の様様を再現しました。

後半は、日本書紀や吾妻鏡等から天文現象を参加者が見つけ出すオーロラハンターの作業が行われ、明るい時間に見えた流星の記録など、多くの天文現象が記録票に書き出されました。見つけた天文現象に対して、文系の研究者と理系の研究者、それぞれの分野から解説がなされ、異分野融合共同研究ならではの成果が確認できました。参加者から集められた情報は、共同研究のメンバーによって整理され共同研究のウェブサイトから公開される予定です。

なお、本事業は、日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画で実施している異分野融合共同研究(典籍防災学)「典籍等の天文・気候情報に基づく減災研究の基盤整備」、及び総合研究大学院大学学融合萌芽的共同研究事業「天変地異と人間社会の変遷：言葉の在り方と世界の在り方」による、当館と国立極地研究所、及び総研大・学融合推進センターとの共同主催です。



会場の模様



太陽黒点を球体スクリーンに投影



LOD Challenge 2017 の最優秀賞に当館の「日本古典籍データセット」が使用されました

当館は、歴史的典籍NW事業において古典籍画像の一層の活用を図るため、日本古典籍のデジタルデータのオープン化を目指しています。取り組みの一つとして、情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設人文学オープンデータ共同利用センターと、「Linked Open Data チャレンジ Japan 2017」にデータ提供パートナーとして参加し、「日本古典籍データセット」「日本古典籍字形データセット」「江戸料理レシピデータセット」を提供しました。データセット部門で最優秀賞を受賞した千葉大学附属図書館の高橋菜奈子氏による「小倉百人一首 LOD」には、「日本古典籍データセット」に収録されたデジタル画像が利用されました。

<http://lodc.jp/2015/concrete5/blog/2018-02-22>

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○平成 29 年度第 2 回特別講義を開催

平成30年3月27日（火）に、平成29年度第2回特別講義を開催しました。興味深い内容に、会場から多数の質問が出されていました。

講師および講義題目は次のとおりです。

ダヴァン ディディエ 准教授「禅と俳句 — ステレオタイプの再検討」

加藤 聖文 准教授「アーカイブズの可能性」



ダヴァン ディディエ 准教授



加藤 聖文 准教授

○平成 29 年度学位授与（平成 30 年 3 月授与分）

平成29年度の学位（博士号）が以下のとおり授与されました。

宮永一美（論文博士）「越前朝倉文化の研究」

○平成 29 年度春季学位記授与式について

平成30年3月23日（金）に、総研大の葉山キャンパスにて平成29年度春季学位記授与式が開催されました。当専攻からは、宮永一美さん（論文博士）が出席し、長谷川真理子学長から学位記を授与されました。



（左から）山下研究科長、宮永氏、
落合専攻長、神作教授

5月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

6月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

7月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

- 開館:9:30～18:00 ● 請求受付:9:30～12:00,13:00～17:00 ● 複写受付:9:30～16:00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館:9:30～17:00 ● 請求受付:9:30～12:00,13:00～16:00 ● 複写受付:9:30～16:00

展示スケジュール (5月～7月)

通常展示 「和書のさまざま」
 会期 2018年1月15日(月)～5月26日(土)
 通常展示 「書物で見る 日本古典文学史」
 会期 2018年6月11日(月)～9月15日(土)
 ※休室日
 日曜・祝日、夏季一斉休業日(8月13～15日)、
 展示室整備日(5月9日、6月27日、6月30日、
 7月11日、8月8日)

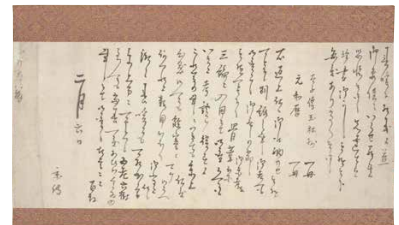
大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

国文学研究資料館のゼミ室で、豊富な所蔵資料を利用しながらゼミや講義を行うことができます。
 ※学部・大学院で行っている日本文学や日本史の授業が対象となります。
 ◆詳細は当館 WEB ページをご覧ください。
<http://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/univ/shien.html>

表紙絵資料紹介

山東京伝書簡 [江戸後期] 写。本紙15.5×35.8cm、軸装1幅。

江戸時代後期に活躍した戯作者・山東京伝筆の書簡。
 借用した「太子伝玉林抄」一冊「元和暦」一冊を返却し、「骨董集三編二入用」のために「別紙之事」(欠)について教示を乞う内容。『骨董集』は二編まで刊行されたが(文化十年<1813>成立。同十一～十二年刊)、文化十三年に京伝が没したため三編以降は出版されていない。



署名の前に「二月六日」とだけあり差出し年次は不明であるが、井上和雄氏によって紹介された文化十三年二月二十六日京人某宛京伝書簡(『浮世絵』第48号。後に肥田浩三「山東京伝書簡集」に再掲)に「当時著述に取懸り居候骨董集三編に入用にて」とあり、本書簡も同時期のものと思われる。京伝は特に晩年、その情熱を考証に向けており、知人から資料を借用していることが指摘されている。

宛名は手ずれにより判読できないが、「弘文荘古書販売目録 日本の直筆本・付直筆書簡」(昭和五十四年二月)に「中川忠英宛カ」とある。忠英も資料提供者のひとりとして知られるが、ほぼ同時期と目される忠英宛竹垣直清書簡(『森銚三著作集』第四卷「山東京伝の歌舞伎古圖考証」掲載)からは、忠英と京伝が直清を間に立て資料と考証のやり取りを行う様子が窺え、二人の間に直接的な交流はなかったと思われる。本書簡の「これ等の事につきても参上仕度心懸候へとも(中略)御ふさた仕候」という一文から、宛先はそれなりに親しい関係の人物であったことが想像され、忠英であるとは考え難い。

「五老六樹主人ニも当春一度あひ候」とあることから、京伝、石川雅望と同じ交遊圏にいた人物への書簡であると思われる。晩年の京伝の交遊圏を窺うことのできる重要な資料であり、後考を俟ちたい。

(請求記号 ヨ6-23)

(有澤 知世)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8606

発行日 平成30(2018)年5月7日
 編集 国文学研究資料館企画広報室
 印刷所 株式会社 アズディップ
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館